

# アメリカの大学におけるコメンズメントスピーチ (五)

ロバート・クルウィッチ

小笠原 はるの

遠 藤 昌 子

本稿では、現代アメリカ社会のスピーチ文化の一つであるコメンズメントスピーチについて考察する。ここでは、二〇一一年にカリフォルニア大学バークリー校ジャーナリズム大学院で行われたコメンズメントスピーチを取り上げたい。まず、スピーカーであるジャーナリスト、ロバート・クルウィッチ、そしてスピーチの中で取り上げられているアメリカを代表するジャーナリスト、エドワード・マローについて紹介したうえでスピーチの翻訳を試みる。

## 一、ロバート・クルウィッチについて

はじめにコメンズメント・スピーカーであるロバート・クルウィッチについて紹介する。クルウィッチは、アメリカのテレビ、ラジオ、ポッドキャスト界で精力的な報道を行っているジャーナリストで、その幅広い活動範囲から「ネットワーク・リポーター」と呼ばれている<sup>\*1</sup>（写真1）。

彼の活動の原動力となったのは、多岐に渡る分野の知識、関心、経験であった。リベラルアーツカレッジとして

名高いオーバリン大学ではアメリカ史を専攻し、コロンビア大学のロースクールでは法学を修め、卒業の二ヶ月後にはウォーターゲート事件のヒアリングリポートをラジオ局に送り、ジャーナリズムの世界に足を踏み入れている。

一九七六年には音楽業界をリードするローリングストーンズ誌のワシントン支局長のポストに就き、一九七八年から一九八五年までは米国公共ラジオ放送局（NPR）の特派員として、ビジネス・経済部門を担当した。時期を重ねて、一九八四年からはCBS放送局の数々の看板番組でニュース解説をするようになり、一九九四年からはABC放送局でナイトラインなどの花形ニュース番組を受け持つようになった<sup>＊</sup>。

二〇〇四年頃からは科学をテーマにした報道に取り組み始める。科学ジャーナリストは、科学者によってもたらされた専門的で非常に詳細な情報や専門用語を伴った見解を、一般的な読者や視聴者が理解できる形に翻訳する役割を担っている。科学的知識や科学に関する社会問題をマスメディアを通じて市民に伝達するには、科学を理解する高度な知識だけでなく、科学を文化的な側面から見直す、つまり科学と自分たちの生活にどのような関係があるかを捉える視点が不可欠となる。科学と社会との仲立ちをテレビ番組で行うことは非常に難しいとされてきたが、クルウィッチはイラストや音楽を駆使して、「人ゲノムと何か」といった難解なテーマから、「夜空には星がちりばめられているのに、なぜ夜は暗いのか」といった子供からの質問まで、抽象的かつ複雑な科学概念をわかりやすく説明しながら、人々に科学への関心を持たせ、さらに科学への関わりを促すことに成功してきている<sup>＊</sup>。このように、



写真1 ロバート・クルウィッチ

<http://blogs.discovermagazine.com/notrocketscience/2011/05/12/“there-are-some-people-who-don't-wait”-robert-krulwich-on-the-future-of-journalism/>, ディスカバー誌ホームページ（2012年10月2日取得）

クルウィッチは独自の専門性を築き上げ、広く社会に貢献していることから、アメリカのジャーナリズム界で高い評価を受けている。

クルウィッチが二十一世紀のアメリカを代表するジャーナリストであるならば、前世紀を代表する存在はエドワード・マローといえよう。本稿で紹介するスピーチでは多くのアメリカの著名なジャーナリストが言及されているが、ここでは、特にマローについてみていく。

## 二、「放送ジャーナリズムの父」エドワード・マローについて

エドワード・マローはアメリカの「放送ジャーナリズムの父」と呼ばれ、彼の功績や人生を検証した文献も多い（写真2）。また、彼の名前を冠したジャーナリスト育成機関がアメリカ国務省に設けられ、アメリカ国内だけではなく、世界各国からのジャーナリスト、又はジャーナリスト志望者が学ぶ場となっている。同様なプログラムは、タフツ大学やワシントン州立大学などにも設置されている。さらに、マローの名前で、多くの賞が顕著な活躍をしたジャーナリストに与えられている。外交問題での貢献に対する賞、公共ラジオ放送部門の賞、ニュース番組ディレクターが選出する賞などである（写真3）。このようにマローは没後半世紀の現在でも、ジャーナリズム界で称えられる存在である。

次に、マローの経歴を簡単に紹介する。マローは一九〇八年にノースカロライナ州のクエーカー教徒の家に生まれた。六歳の時

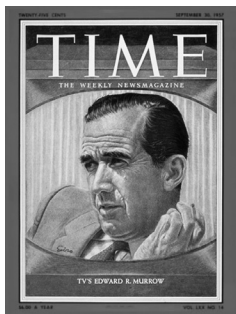


写真2 1957年にタイムの表紙を飾るエドワード・マロー

[http://bztv.typepad.com/instanthistory/2005/10/edward\\_r\\_murrow.html](http://bztv.typepad.com/instanthistory/2005/10/edward_r_murrow.html),  
タイム誌ホームページ（2012年11月2日取得）

に、ワシントン州に転居し、高校ではディベート部で活躍し、生徒会の会長をつとめた。卒業後はワシントン州立大学に入学し、スピーチ学などを学んだ。学生自治会で積極的に活動し、全米学生自治会の会長に選出されている。卒業後はニューヨークに移り住み、一九三二年から三五年まで、NPO機関勤務のあと、一九三五年には教育関係のディレクターとしてCBS放送局に採用された。

当時、CBS放送局は、ニュース放送のためのチームを立ち上げていた。マローは入社二年目の一九三七年にナチスの台頭などで緊張が高まっていたヨーロッパへの特派員として、ロンドン駐在となった(写真4)。そこで彼はヨーロッパ各地の激戦地から第二次世界大戦の戦場の様子や市民の生活を報道した。

ラジオから流れる彼の声で、アメリカの家庭の居間に戦時下のヨーロッパの様子が臨場感あふれるまま伝えられた。中でも、ドイツのブッシュェンワルドにあったナチスの強制収容所からの放送は累々と横たわる五〇〇体のユダヤ人の亡骸を眼前にして鬼気迫るものであったと言われる。また、一九四〇年九月から約二か月間連続したロンドン爆撃の現地報告は、アメリカ人に強い衝撃を与えた。やがて戦争が終わり、アメリカに帰国したマローは、戦争報道の勇者として市民に歓迎された。

その後まもなくマローはCBSテレビで、ニュース番組を受け持つようになる。中でも、一九五三年にマローが



写真4 1930年代 ヨーロッパ特派員時代のマロー

<http://dca.lib.tufts.edu/features/murrow/exhibit/cbseurope.html>,  
タフツ大学図書館ホームページ (2012年11月2日取得)



写真3 2012年のエドワード・マロー賞の告知用画像

[http://www.rtdna.org/pages/media\\_items/2012-national-edward-r.-murrow-award-winners2089.php?g=67?id=2089](http://www.rtdna.org/pages/media_items/2012-national-edward-r.-murrow-award-winners2089.php?g=67?id=2089),  
Radio Television Digital News Association ホームページ (2012年11月2日取得)

制作したマッカーシー上院議員に関する番組は、社会的に強い影響力を持つものであった。当時、ソビエト共産主義に恐怖を感じるムードがアメリカ国内に広がる中で、マッカーシー議員はアメリカ政府内と娯楽産業における共産黨員、または親共産党的な人物への攻撃をおこなっていた。彼の影響力は強く、政府関係者、映画産業や文化人などが共産黨員、またはそのシンパと言う理由で、名指しで非難され、確たる証拠がないまま、公職から追放される場合があった。マッカーシーは、世論の後押しも受け、絶大な力を持ち、彼に対して疑義をはさむことは非常なリスクを伴うものであった（写真5）。しかし、マローは、マッカーシー議員の言動の矛盾点を指摘し、「赤狩り」と呼ばれた反共運動の行き過ぎに警鐘を鳴らした。このマローの番組がきっかけとなり、マッカーシーの強硬な姿勢に追隨してきた世の中の動きが方向転換して、マッカーシーズムが勢いを失うことになった。この両者の対決は、二〇〇五年の「グッドナイト グッドラック」という映画でも描かれている（写真6）。

一九五四年から一九六一年までマローは「シー・イット・ナウ」というニュース番組を制作した。番組で彼は、当時はまだ議論されていなかった社会問題をしばしば取り上げた。例えば、南アフリカのアパルトヘイト、テキサスの黒人差別、タバコと肺がんの



写真5 マッカーシーの議会での証言映像



写真6 2005年の映画  
“Good Night and Good Luck”

<http://www.warnerbros.com/movies/home-entertainment/good-night-and-good-luck/81566c0e-dffe-437a-9533-c7f6d9926d49.html>, ワーナーブラザーズ インディペンダントムービー ホームページ（2012年11月2日取得）

[http://face2face.si.edu/my\\_weblog/2008/11/portrait-of-joseph-mccarthy-by-george-tames.html](http://face2face.si.edu/my_weblog/2008/11/portrait-of-joseph-mccarthy-by-george-tames.html), ナショナル・ポートレート・ギャラリー ホームページ（2012年11月2日取得）

関係などである。それによって正統派のニュース番組と高く評価されるものになった。<sup>\*)</sup>

しかし、やがてテレビ番組は視聴率競争の時代に入ってしまった。五十年代の後半には、硬派の社会問題を扱うマローの番組は、娯楽番組のような高視聴率が望めないため、視聴者数の少ない日曜日の午後に移行され、やがては不定期番組に格下げされてしまったのだ。このような視聴率競争が主流となる状況に、強い懸念を抱いたマローは、ラジオ・テレビ・デジタルニュース協会の一九五八年の大会で、その傾向を激しく非難した。<sup>\*)</sup>

テレビは何かを教えることができ、知られていないことをみんなに知らせることもでき、人に勇気を与えることさえできる。しかし、テレビ番組を制作する側の人間がそう思えば可能になることで、そうでなければ、ただの電線と電球を入れた箱に過ぎない。

(中略)

私たちが今住んでいるこの世界が多くの矛盾と問題を抱えている事をみんなに知らせる番組を作ってほしい。

(中略)

テレビ局は質の高い番組づくりをする責任がある。大衆が喜ぶ番組を作るべきと言うけれど、いつもそんな番組でいいはずはない。【原文英語】

このように、彼は視聴率競争に明け暮れ、娯楽番組に偏った番組編成をするテレビ局を批判した。そして、一九六一年にケネディ政権でアメリカ文化情報局長官に任命されたのをきっかけに、CBSを去った(写真7)。彼は

生涯を通じて、報道の持つ力によって、世の中で起きていることを一般市民に気づかせ、正しい方向に世論を動かすことを使命としたのであった。エドワード・マローはジャーナリストを目指す若者たちにとってのロールモデルともいえるべき存在であった。

### 三、アメリカのジャーナリズム大学院について

現在アメリカでジャーナリストを目指す場合、多くのものは、大学院に進学する。というのも、アメリカには、ジャーナリストに与えられる「ピューリッツァー賞」を運営するコロンビア大学、ミズーリ大学、ノースウェスタン大学など、多くの著名な大学にジャーナリズム専門の大学院が設置されているからである。このスピーチが行われたのは、カリフォルニア大学バークリー校のジャーナリズム大学院で、学術的見地と実践的見地の両面からジャーナリズムを学び、刻々と変化する社会の実情を的確にとらえる人間を育成する教育が注目されている（写真8）。

ジャーナリストは、アメリカを始め、海外では高度な経験と知識を身につけた専門職として認知され、個人での発言力も重視されている



写真8 カリフォルニア大学バークリー校のキャンパス

<http://newspaper.li/uc-berkeley/>, カリフォルニア大学バークリー校大学新聞ホームページ  
(2012年11月2日取得)



写真7 ケネディ大統領のもとでアメリカインフォメーションエージェンシー長官に任命されたマロー

<http://dca.lib.tufts.edu/features/murrow/exhibit/usia.html>, タフツ大学図書館ホームページ  
(2012年11月2日取得)

が、日本では報道機関の一職員といった見方が強く、記者個人の言説というよりは所属機関の性格にそった報道が行われる傾向が強い。

今回取り上げるコメントスピーチは、ジャーナリストとしての人生を模索することがテーマとなっており、「個人」として存在するアメリカのジャーナリストの生き方が色濃くでている。ここではそのスピーチを翻訳を通して紹介したい。

#### 四、ロバート・クルウィッチのコメントスピーチ

(二〇一一年五月七日 カリフォルニア大学バークリー校にて。)

トロイの木馬はきみたちの中にある

ロバート・クルウィッチ

翻訳 小笠原はるの・遠藤昌子

二〇一一年卒業生のみなさん、みなさんはスタートラインに立っている。つい先日までは、課題や試験に追われて、息もつけない忙しさだったよね。でもこれからは、少し楽になるよ。楽になりすぎて、次に何をしたいかわからないかもしれない。今日の話はその辺のところだ。みんなが目指しているジャーナリストの世界についてだ。



といっても、ジャーナリストにはなかなかないけどね。

新聞、雑誌、テレビにネット、全国紙からメールマガジンまで、ジャーナリストの世界はどれもトロイの城塞のようだ。あの高くそびえる城壁の中には、入り込む隙もない。運良く先に入った人たちは、外の人間を見下している。みんなは城塞を見上げて、どうやって入れるの、と尋ねるが、だれも答えてくれない。

いい質問なんだけどね。どうやっていい仕事につけて、大学院で出会ったようないい仲間と働いて、有名なジャーナリストの仲間入りができるのか。ほら、きみたちの友人には良くできるやつがいたり、かなわないと思うやつがいたりするだろう。

これからもそういった仲間と仕事をして、いい文章を書いたり、的を得た質問をしたり、うまく記事にまとめたり、いろんな人と会ったり、知らない場所に行ったり、世の中の動きを知ったりしたいだろう？ そうだね。それがジャーナリストになるってことだね。それがきみたちがやりたいことで、それさえできれば満足するかもしれない。もちろん給料はあるにはこしたことはないけど。

でも、今はジャーナリストになるのは無理に思える。履歴書を送ったり、知り合いを頼ったり、知り合いの知り合いなど、だれでも彼でもなんとか自分を売り込もうとしてみる。それで仕事に就けるときもあるけど、就けないこともある。

ギリシャ人がトロイの城塞に入るのだって十年もかかった。頭の切れるユリシーズが、海辺で策略を練りに練って、やっとトロイの木馬がひらめいたんだ。彼くらい賢くないと仕事にはつけないのか、と思うだろう？

というのも、今はひどい状況だ。八十年代に生まれたきみたちは不況につぐ不況で、自分たちがついていないと思ってしまう。きみたちだけでなく、ご両親だって、就職は無理だと思うかもしれない。でもそうじゃない。そん

なことはない。きみたちは、これから豊かに広がる世界に足を踏み入れるんだ。斬新な考えや躍動する時代のうねりの中に飛び込むんだ。これまでとは違う。これまでよりずっといい。今はそう思えないだろうが、きみたちはついている。いい話をしよう。

あるCBS記者がいた。CBSといえばジャーナリストのあこがれだ。その記者はわずか二十三歳のときに、スカウトされた。ノースキャロライナ州のシャーロット新聞で記事を書いていたところ、突然の電話で、ニューヨークのマディソン街にあるCBSへ来るようにいわれて、仕事をもらえたんだ。いい記事を書いていたんだね。今ならありえないことだ。彼の文体は勢いがあって、あつという間に記事を書き上げる。彼の名はチャールズ・クアルト。

チャールズが面接のため、はじめてCBSに行ったときのことだ。廊下を歩いていると、ドアに金文字で「ミスター・マロー」とある。エドワード・R・マローのオフィスだった。マローといえば、当時は夜のニュースの花形キャスターだ。

このように、チャールズが入局して目にしたのは、ロッカーに書かれたそうそうたる顔ぶれのジャーナリストの名前だった。きみたちは知らないかもしれないけれど、ジャーナリストの世界では神様のような人たちだ。エリック・セーヴェリッド、チャールズ・コリングウッド、リチャード・C・ホテレット、ダニエル・ショー、ロバート・トラウトの面々だ。二十三歳のひよっこチャールズにしてみると、信じられないことだった。マローのために原稿が書けるなんて!「オー・マイ・ガッド」って感じだ!

チャールズはマローのために原稿を書く仕事から始めたが、取材もやってみたかった。そして、そのチャンスがすぐにやってきた。ある夜勤の晩、夜中の二時にニュースの一報が飛び込んだ。飛行機がラガーディア空港の滑走

路に着地できず、手前のイースト・リバーに墜落し、沈みかけているという。

チャールズと同僚はコインを投げて、どちらが現場に行くかを決めた。勝ったのはチャールズで、彼は階段を駆け下り、タクシーに飛び乗って、ラガーディア空港までと叫んだ。しかし、ミッドタウントンネルをぬけると、それ以上進めなくなった。空港に向かう消防車で渋滞していたのだ。チャールズはタクシーを乗り捨てると、渋滞をぬうように走ってきたオートバイに向かって、大きく手を振ってとまらせた。「CBSの記者なんだ、飛行機が川に落ちて、現場に行きたい。時間がない。乗せてくれ」オートバイは、映画のスタントのように車をかき分け、空港へ向かった。チャールズが最初に現場に着いた記者だった。彼はフェンスを乗り越えて、生存者にインタビューをし、それが夕方のニュースに流れた。これがきっかけで、彼は取材記者となる。二十三歳という最年少の若さだった。

チャールズは原稿を書くのがうまかったただけではなく、取材にも芯があった。ぼくは魅了された。ぼくが一番尊敬している記者だ。ぼくがCBSに入社したとき、チャールズにあこがれたように、チャールズもエドワード・マローにあこがれていたという。

入社して四十年たった一九九〇年頃には、ぼくはチャールズの隣にオフィスをもらっていた。特別な気持ちだったね。全能の神さまの隣にいられるんだ。

ある秋の夕方のことだ。ぼくがチャールズのオフィスに入ると、彼は沈みかける太陽を背にして座っていた。まるで聖人のようだった。目が逆光に慣れると、チャールズが親指と人差し指の間にタバコのようなものをはさんでいるのがみえた。彼はタバコは吸わない。タバコのように見えたのは、丸めた新聞の切り端だった。チャールズは、ウォール・ストリート・ジャーナルの一面の記事に気になる箇所をみつめて、ペンでぐるぐると印をつけ、その部

分がとれて、指先で丸めていたのだ。チャールズはおもむろに丸まった紙片をデスクの上に置き、ぼくを見てゆっくり立ち上がると、紙片を指さして、オフィスから出ていった。

ぼくは不思議に思った。何だろう？何が気になったのか？新聞に目をやると、一面はCBSの話だった。少し前のことから、細かいことはうる覚えだけれど、だいたいこんなことだ。CBSは巨額の報酬で、マイアミのテレビ局からプロデューサーを引き抜き、シカゴの人気テレビ局WBMMに抜擢した。そもそも、マイアミのテレビ局は、いったい視聴者がいるのかといったほど無名だった。このプロデューサーは——名前はもう忘れてしまったけれど——アナウンサーに水着を着せてビーチからリポートをさせていた。これ見よがしに肌や曲線美を露出させ、濡れた身体を見せつけて人気取りをしたのだ。その結果、六十パーセントだった視聴率が、五十パーセントへ急上昇し、マイアミの住人の半分が見る番組になった。指で丸められた紙片を開くと、鉛筆で何度も囲まれた部分が読めた。「エドワード・R・マローやチャールズ・クラウトといったそうそうたる記者を抱えるCBSが、なんとこのような人物をプロデューサーに雇ったのだ」

ちょうどそのとき、チャールズがオフィスに戻ってきた。ぐったり椅子に腰をおろすと、まるで友人が死んだか、友人に裏切られたかのような顔つきでぼくを見た。みんなはこう思うだろう。「もちろん、CBSだってビジネスだ。五十パーセントの視聴率がとれる方法があるのなら、やるだろう。どんなビジネスでもそうするだろう。うまくいくかもしれないし、いかないかもしれない。マイアミの真似をして十月にシカゴの放送局が水着でリポートをさせるのはどうかなと思うけれど、それもありえる。それがビジネスというものだから」

でも、チャールズ・クアルトがCBSに入ったころ、報道はビジネスではなかった。使命だった。人を救い、人を助けるといった目的があり、その姿勢を貫いていた。CBSの特派員として、第二次世界大戦や朝鮮戦争、ベト

ナム戦争といった戦場に赴き、戦火をくぐって生き残れば、帰還兵のようにたたえられた。チャールズも同じような経験をしていた。あるとき、ベトナムの戦場で、彼と同行カメラマンのフレディ・デイトリッチは、敵陣に迷い込んでしまった。当時取材に協力してくれていた南ベトナム軍のサン少佐が、二人の安否を確認しにやってきた。そのサン少佐は敵の狙撃兵が放った弾丸を頭に受け、チャールズの隣で息絶えたのだ。

死と隣り合わせの戦場で取材をしたことを、会社は高く評価し、それに報いてくれるだろう、とチャールズは思った。仕事ぶりがふるわなくても、首にはならない。当時はそういうものだった。もっともCBSがいつも記者を大切に、いつも理想的な待遇をしていたわけではない。でも、チャールズのような記者には、それ相応の見返りがあった。「君が誠意を尽くして、いい仕事をすれば、身分を保障し、給料も払い、首にはしない。会社にとって君は誇りで、君にとっても会社は誇れる場所だろう」

チャールズはCBSに骨を埋める覚悟で仕事にのぞんだ。しかし、経営陣の入れ替えが何度も起こるようになり、一九九〇年代になると、そんな報道の精神が色あせてきたのだ。チャールズがウォール・ストリート・ジャーナルの記事を読んだのはそんなときだった。CBSも他局のように効率を求めるようになっていた。売れっ子を次々と雇っては首にする。月曜日に採用して木曜日にはお払い箱。ひどいときには、翌日までいられないかもしれない。チャールズには思いもよらないことだった。マローの精神が息づいていると思っていたからだ。現状は受け入れがたかった。

ぼくはその日、夕暮れの中、チャールズと向かい合って話したのを覚えている。ぼくは彼にいった。「もう昔とは違うのです。ぼくたちの世代は、いい会社でやりがいのある仕事をし、高い給料をもらっても、定年までそこにいられるとは思っていません。会社の都合しだいで簡単に首にされた例をたくさん見てきているんです。理不尽な

ことです」

チャールズが若いときは、仕事に専念するだけでよかった。オートバイを捕まえて、飛行機の墜落事故現場にか  
けつけ、最新のネタを得るやいなや会社に戻る。世界最高のニュース現場を舞台に飛び回る若き獅子。なんと幸せ  
なことが。でも、もうそんな時代ではない。

昔だったら、たとえばニューヨーク・タイムズ、ウォール・ストリート・ジャーナル、CBS、NBC、タイム  
誌、ニューズウィークに入社したら、仕事のやり方を徐々に覚えて、そのうち一人前になった。でも、そういう時  
代は終わった。

これからはきみたちの時代だ。今は就職したからといって、ずっとそこにいられる保障はない。NBC、ESP  
N、ニューヨーク・タイムズ、NPRといった大手のマスコミは、安定企業にみえる。みんなもそう思うだろう。  
でも、先のこととはわからない。状況は常に変わる。企業は業績が悪くなると、社員を守れない。最近じゃ、守ろう  
ともしないけれどね。ここで、あらためて考えてみよう。

ジャーナリストとして生きていくにはどうすればいいのか。何から始め、何を求め、何をやりがいとするのか。  
まずどうするか。やり方は人それぞれだけど、最近、こうすればいいというルートが見えてきた。ゼロから始め  
て、次第に認められ、ときには収入を得て、そのうちにちゃんと生活ができるようになるというルートだ。きみた  
ちのような若い人たちにぴったりだ。簡単ではないけれど、考えてほしい。

ジャーナリストになりたいと思ったら、その方法を考えるよね。何の取材をする？戦争？野球？ウォール街？議  
会？ハリウッド？そこにはどうやって行くかい？履歴書を送って、返事が来るのを待ってればいいかい？

でも、待たなくてもいい。ぼくの場合は、わけもわからず何かに突き動かされた。心がうずき、待ってちゃだめ

だ、自ら動けと心の声がいった。

ぼくが十代のころ、テレビで政党大会を母親とよく見ていた。大統領候補指名大会のとき、上院議員や市長や政治家が映し出され、会場にはスローガンや風船やあの奇妙な帽子が溢れていた。カメラがまわり、ライトがあたり、ドラマが繰り広げられる。ケネディかステイブソンかの駆け引きだ。大人になったら、この目で見てみたいと思った。

だから二十歳になった一九六七年、思いきって党大会に行ってみた。シカゴ民主党大会で騒動があった前の年のことだ。左派の反戦活動家たちが、マーティン・ルーサー・キング氏と世界的に有名な小児科医のベンジャミン・スポック氏を、大統領と副大統領の候補にしようとしていた。ぼくは、そこに行つて取材をしようと思ったんだ。

取材といつても、何をしていいのか見当もつかなかった。でもテレビで見る限り、何より目立っていたのが、記者が首からぶらさげている記者証だった。それで、ぼくはニューヨークの文房具屋でアルファベットを転写するシートを手に入れた。当時はだれもプリンターを持っておらず、あるのはタイプライターだけで、その印字では偽物だと見破られてしまう。二ドル五十セントで買った文字のシールは、一シートにつき五十文字が印刷されていた。そこから自分の名前のアルファベットを貼りつけ、記者証をつくった。肩書きはイェール大学新聞部。

でも、ぼくが通っていたのはオーバリン大学だ。それではいまひとつ知名度がないから、イェール大学の校章つきの記者証を作り、指導教授の署名もそれらしい色や筆跡で仕上げ、ラミネートも二重にした。厚みがあればあるほど、本物に見えるからね。シカゴのヒルトンホテルの会場に足を踏み入れたとき、これで忍び込めると思った。問題だったのは、イェールも学生記者を送りこんでいたことで、のちに國務次官となったストロボ・タルボットだった。記者登録をするとき、彼はぼくの二人後ろに並んでいた。それから三日間は彼と鉢合わせしないように気をつ

けた。とにかくぼくはまんまと党大会に入り込めたんだ。

そこで、見よう見まねで記者のすることをやってみた。廊下を走ってインタビューし、必死になってメモを取る。会場からプレスルームに急ぎ、猛烈な勢いでタイプライターのキーを叩く。いったい何を書いたのか覚えていない。だって、ぼくは特派員ではないんだから、記事を書いても送り先がない。ただ書いていただけ。でも、天にも昇る気持ちだった。

大会の最中、廊下で喧嘩がおきた。荒っぽいシカゴのことだから、殴り合いになった。ぼくは取っ組み合いのまっただ中にもぐり込み、殴られた人のコメントをとった。ポーランド系でやたら母音が多い名前だった。他の記者も正しいスペルを知りたいだろうと思って、床に這いつくばったままぼくは彼に訊ねた。「名前の綴りを教えてください」彼は床に頭を押さえつけられたまま答えてくれた。ぼくはそこから這い出て、十分後にはプレスルームにいた。イエール大学の記者がいないことを確かめて、マイエルスキーというその男の綴りを得意になって教えた。どうだ、すごいだろう。

当時は学割を使うと、シカゴからニューヨークまでの航空運賃が三十ドル。帰りの飛行機で、ぼくの隣に座ったのはベンジャミン・スボック。副大統領候補という時の人だ。どこに掲載するあてもないけど、彼に独占インタビューができすぎて嬉しかった。空港から街中まで一緒にタクシーで帰った。そのタクシーにぼくは鞆を忘れた。次の日、母から電話があった。「スボック氏を知っているの？ たった今、あなたが忘れた鞆を届けにきたわよ」鞆のネームタグに実家の住所が書かれていた。さすがに母には自分がしてきたことをいえなかったね。

今でもよくわからないけれど、ただただ党大会に行ってみたかった。昔からジャーナリストになろうとか、あこがれていたというわけではなかった。当時、ヘアラバ物語Vで正義感あふれる法廷弁護士を演じたグレゴリー・



ペックを見て、彼のようになりたいと思っていたんだ。

だから、大学を卒業し、兵役を終えると、ロースクールへ行った。ジャーナリズムの世界にあこがれていたわけでも、それしかないと思っていたわけでもない。でも、ジャーナリストの種は蒔かれていた。だから、ロースクールの卒業するころには、弁護士道は自分に向いていないと気がついた。才能もないし、そういうタイプでもない。では、何ができるだろう。何が得意なのか。自分は物事を説明するのが得意だと思った。知らないことを学んだり、人に会ったりできる仕事ってなんだろう。そのとき、シカゴでのあの週末を思い出した。

当時はロースクールを出たばかりで、自分に何ができるかを探っていた。ジャーナリズムの世界なら可能性があると思った。あのシカゴでの週末があったからこそ、そう思ったんだ。ジャーナリストになりたい気持ちが強くなってくると、次にすべきことが見えてきた。その頃、ウォーターゲート事件で、ニクソン大統領の弾劾が話題となっていた。そこで、ぼくはみんなが疑問に思っているような十の質問と回答を考え、居間のテーブルコーダーに想定問答を吹き込んだ。

第一問 大統領が弾劾されたら、すぐに刑務所に行くのですか？

いいえ、まず裁判になります。

第二問 どの裁判所が担当しますか？

第三問 裁判官はだれですか？

第四問　だれが陪審員になりますか？

第五問　もし、上院で審議が行われたら、上院議員が陪審員になりますよね。その場合、重要な証言中、十二人のうちの六人がトイレに行ったら、どうなるんでしょう。普通の陪審員はトイレにも行けませんが、上院議員は行けるんですか。

第六問　ニクソンの弁護士はだれですか？

第七問　検察官はだれですか？

第八問　弾劾されても、大統領は仕事を続けていいんですか。

などなど……

こういった質問と回答を四十分のドラマにして書きあげた。法律の勉強が役に立ったと思う。それから、ABCのスポーツ解説者、ハワード・コーセルの口調でテープに吹き込んだ。テーマは政治だけど、スポーツ仕立て。出来がよかったわけではないけれど、左派寄りのマイナーな地元ラジオ局がぼくのテープを放送してくれた。それが最初の一步となった。人に伝えたい、書きたい、話したいという気持ちに突き動かされたんだ。

最初からジャーナリストを目指さなくてもいい。たまたまジャーナリズムの世界に入ったっていいんだ。

でも、好きこそもの上手なれだ。何が好きかは人それぞれだ。スポットライトを浴びて、カメラの前で司会や解説をしたり、ニュース原稿を読んだり、一面に署名入りの記事を書いたり。それが好きな人もいるだろう。逆に、表に出ない仕事が好きなのもいる。制作やデザインや事務処理など。

仕事のやり方の好みもいろいろだ。スピード勝負で、何か見つけたらてきばきと楽しんでやって、はい終わりとする人。反対にじっくり型もいる。現場に出かけ、聞き込みをし、考えを巡らせ、草稿を書く。仕事に時間をかける。

やりたいことは人によって違うけど、のめり込む気持ちが大切だ。目覚めるやいなや、夢中になってやりたいことをやる。一日中ワクワクしながら、仕事をする。

といっても、そこまでしなくてもいいのかもしれない。おだやかな日々を送れるからね。ただ、のめり込める方がいいに決まっている。

やりたいことをやるにはその道の大手に就職するという手もある。有名なコンデナスト出版にスポーツ・イラストレーテッド、MTV。確かに、そこですまはお茶汲みから始め、コピーをとり、そのうち原稿を書く。チャールズ・クアルトは才能があったので、そうやってあっという間に出世した。当時のやり方だ。

今は他のやり方がある。簡単ではないし、だれにでも向いているというわけではないけど、みんなの役に立つかもしれない。

例えば、ニューヨーカーが採用してくれるのを待つかわりに、きみは自宅で好きなことをしてみる。書くのが好きなら、ブログを書けばいい。映画を作りたいなら、気の合う友人に声をかけて、一緒に脚本を書いてみるといい。

とにかく何かをやってみるということだ。だれもお金を出してくれないし、気にも留めてくれない。気づかれもしない。やっている本人以外はね。それから、それを発表したり、ネットで公開したりする。今の時代、方法はいくらでもある。一つ出来たら、また次を作る。

でも、きみはこうだろうか。結婚していたり、子供がいたりしたら、食べていけないじゃないかと。そう、やりくりするって大変だ。楽しくもなんともない。家賃の支払いに車のローン、それに医療費をクレジットカードで分割払い。次々に来る請求書は山積み状態。ジャーナリストなんて目指さずに、まともな職を選んだやつらは、セールスマンや医者や教師になって、自分の家を買って、ちゃんとした家具を揃えるようになる。ぼくはといえば、いつでも夢なんて追っているから、社会に取り残されてきたという思いがあった。

でも、まわりには、実際、そうやって自分の好きなことをやり続けてきた人たちがたくさんいる。最近ぼくが興味を持っている科学ジャーナリズムの分野もそうだ。昼間の仕事を終えたと、恐竜や神経科学、生物学についてのブログを書く。だれかに頼まれてやっているわけではない。ただ、やりたいからやっている。書き終わると、ツイッターやフェイスブックに載せる。一、二年一生懸命やっているうちに、雑誌社が提携しないかと声をかけてくる。すずめの涙のような謝礼でね。でも、そうしてみても、さらに読者を得て、そのうち記事を書くようにいわれ、担当者につき、出版の契約が結ばれる。ブログを書き始めて三、四年後には、名が売れ始める。仕事の傍らに書いているのではなく、プロとしてやりはじめる。記事を読むのを楽しみにしてくれる読者がついて、軌道にのりはじめる。周りに五、六人はそういったライターがいる。みんな好きでやっていて、自分の言葉で自分らしく表現していて、それでお金ももらえるんだ。

どうやって生活をやりくりしたのかはわからない。実家に世話になった人もいるし、結婚相手や友人に支えても

らった人もいた。

実際に彼らと話したり、仕事をしてみて気づいたんだけど、そういう人たちは互いに励ましあっていて、仲間意識があった。まずはメールでやりとりを始め、実際に会うようになり、それから助け合う。いつかは、互いに仕事をまわすときがくるだろう。ネット世代らしいやり方だ。

ニュースというのは、言葉や映像がつむがれるようなものだ。まるで音楽さ。ニュース放送や新聞の記事にはビートがある。エドワード・マローは、エドワード・マローにしか聴こえない。ハントレーやブリンクレイとは違う。アンダーソン・クーパーとも違う。違う世代に生まれたら、笑いのツボだって違うし、使う道具も異なるよね。タイプライターとパソコン、パチンコとテレビゲームといったように、広告も、CMソングも、歌詞も音楽も違う。話したり、書いたり、映像をつくったりするとき、身体のうちには音楽が流れる。その人なりの音楽だ。世代が違えば、音楽だって違う。何をするのでも、その違いが出てくる。その世代特有のビートがあらわれる。

社会のトップは、変化を求めない。自分たちの音楽がいいと思うから。だから、若い人に向かってこういふんだ。「お前たちの出番じゃない」と。

でも、新しいテクノロジーや方法が次々と生まれるような今のご時世には、きみたちのような若者は、自分たちの音楽を信じなければいけない。その音楽で自分たちの世代へ語りかけ、変化を生み出していくんだ。

これまでもそうだった。一九三〇年に創刊された週刊誌のタイムだって、若きヘンリー・ルースと彼の仲間の斬新なアイデアが源だった。ニューヨーカーだって、ジェイムス・サバーと彼の親友E・B・ホワイト、そして彼らの上司のハロルド・ロスの発想だ。ぼくがローリング・ストーンズ誌にいたころは、ジャン・ウェナーが凄腕のライター、デザイナー、批評家、カメラマンを揃えていた。イラ・グラスも、ジュネレーションX世代に向けて

の雑誌を発刊した。それぞれが、その世代やその時代にしかいえないことを表現していたんだ。

今はきみたちの時代なんだから、みずから動けばいい。仲間を募って何かを始めるんだ。雇われるのを待っているだけではだめだ。見ず知らずの大人に指図されるんじゃない。上下関係ではなく、対等につきあう。友人やそのまた友人に声をかけて、自分たちにとって意味のあることをしてみるといい。それが本当に自分らしく生きるということだ。

会社は当てにならない。チャールズ・クアルトがCBSに外されたように、会社の都合次第だ。友人はそんな真似はしないだろう。友人との関係が大切だ。仕事の経験を積みながら、仲間との関係も築き、どんなときでもお互いに助け合うんだ。

仲間がいれば、難攻不落に思えたトロイの城塞にも入ることができる。城塞を見上げながら、だれかが中から鍵を投げてくれるのを期待してはいけない。自分で木馬を作るなり、中に入る方法を考えなければならないんだ。

トロイの木馬はきみたち一人ひとりの中にあるんだ。それを引っ張りだしてくれるのが仲間だ。どこかの偉い人ではなく、自分の身近にいる人。きみのそばにいて、きみのことを認めてくれ、ともに働き、競い合い、支えてくれる仲間、そういう人がきみを強くしてくれる。

自分で仕事を始める場合、チャールズ・クアルトのようなトントン拍子の出世は望めない。時間はかかるし、不安でいっぱいになるだろう。自宅で仕事をしていると、社会から切り離された気になる。こんなことでは暮らしていけないと怖くなる。

でも、ジャーナリズムの世界にとどまってあきらめずにいたら、やがてはうまくいくよ。なぜだかわからないけれど、そういう人をたくさん見てきているからね。

二〇一一年度卒業生のみなさん、これがわたしからのアドバイスだ。きみたちは「そんなにうまくいくもんじゃない」と疑うかもしれない。でも、せっかくだから、この機会にいつておくよ。

自分の仕事や夢や仲間に賭けてみよう。これまでやってきたことを無駄にしないで、役立てるんだ。友人を信じ、自分の考えによって世界が変わるということを信じるんだ。そして、自分が好きなことを好きなようにやっていく。立ち止まらずに続けていくと、そのうちわかるよ。そこがきみの居場所だと。どうもありがと。

## 注釈

- \* 1 TV Guide, <http://www.npr.org/people/5194672/robert-krulwich> (二〇一二年十月五日取得)
- \* 2 Robert Krulwich,  
<http://www.npr.org/people/5194672/robert-krulwich> (二〇一二年十月五日取得)
- \* 3 Krulwich Wonders: Robert Krulwich on Science,  
<http://www.npr.org/blogs/krulwich/> (二〇一二年十月五日取得)
- \* 4 CBS放送「サン・ミサーのインタビュー」  
<http://www.cbsnews.com/video/watch/?id=1955377n&tag=mnco;lst;2> (二〇一二年十月十日取得)
- \* 5 アメリカ国務省 ホームページ「ABOUT AMERICA, "Edward R. Murrow,"  
<http://www.america.gov/publications/books/edward-r-murrow-journalism-at-its-best>  
(二〇一二年十月十日取得)
- \* 6 The Museum of Broadcast Communication ホームページ  
<http://www.museum.tv/eotsection.php?entrycode=murrowedwar>, (二〇一二年十月十日取得)
- \* 7 Radio Television Digital News Association ホームページ「ローの一九五八年のスピーチ」  
[http://www.rtda.org/pages/media\\_items/edward-r-murrow-speech998.php](http://www.rtda.org/pages/media_items/edward-r-murrow-speech998.php) (二〇一二年十月十日取得)
- \* 8 Robert Krulwich on the Future of Journalism, There are Some People Who Don't Wait,  
<http://blogs.discovermagazine.com/notrocketscience/2011/05/12/there-are-some-people-who-dont-wait->

robert-krulwich-on-the-future-of-journalism/#jump (二〇一二年五月一日取得)

## 参考文献

- 川村雅隆 『放送が作ったアメリカ』 ブロンズ新社、二〇一一年  
スタンリー・クラウド、リン・オルソン (田草川弘訳) 『The Murrow Boys マロー・ボーイズ』、NHK出版、一九九九年  
田草川弘 『ニュースキャスター エド・マローが報道した現代史』 中公新書、一九九一年  
藤田博司 『アメリカのジャーナリズム』 岩波新書、一九九一年  
山口秀夫 『アメリカン・テレビ・ウォーズ』 丸善ライブラリー、一九九四年